

## シユミット・デングラーのヴィルトガンス批判

——「より良きオーストリア文学史」のために

富山典彦

一

アントン・ヴィルトガンス Anton Wildgans (一八八一—一九三三) についてわが国で書かれた文献は、私が「日本独文学会文献情報」<sup>(1)</sup>で確認したかぎり、たった二編しかない。しかもこれらの論文は、ストックホルムでの講演のために書かれた『オーストリア講演』*Rede über Österreich*<sup>(2)</sup>を取り扱ったもので、ヴィルトガンス本来の仕事である詩や劇を正面から論じたものではなく、したがって、少なくとも一九五〇年以降、わが国でヴィルトガンスの本格的な研

究はされていない。わが国のゲルマニストにとって、ヴィルトガンスはほとんど無名であると言つていいだろう。

杉浦論文<sup>(3)</sup>では、その論の冒頭で「大戦間のオーストリア文学というとき、とくに重要な意味をもつのは『オーストリア講演』<sup>(4)</sup>くらいだろう」とさえ断言している。そのうえ、あろうことかヨーゼフ・ロートを持ち出して、「大戦間のオーストリア文学というとき、ヨーゼフ・ロートの名を落とすことはできないだろう」という一文でこの論文が結ばれている始末である。病気のためにストックホルムに行けず、かわりにラジオで放送されて、当時のオーストリア国民に深い感銘を与えたという『オーストリア講演』そ

のものに対しては言わずもがな、この講演から読みとれる  
ヴィルトガンスの思想にも手厳しい批判がなされている。

これに先行する鈴木論文<sup>(6)</sup>では、第一次世界大戦以前の崩  
壊寸前のオーストリア帝国の社会状況の概述から始まっ  
て、大戦後の共和国でアウストロファシズムが成立するま  
でのオーストリアの政治的・社会的背景の記述に重点が置  
かれており、『オーストリア講演』から切り取られた言葉  
が、これらの歴史記述をするために鏤められている。ヴィ  
ルトガンスの口を借りて、帝国崩壊以前のオーストリアか  
ら、第一次世界大戦後の第一共和国を経て、アウストロフ  
アシズムの職能制国家(のHilfsgesam)へと至るオーストリ  
アの精神史を描きだそうとしたかのようである。この試み  
は必然的に、この錯綜した時代の歴史記述としてはもちろ  
ん、ヴィルトガンスの『オーストリア講演』を論じたもの  
としても、どちらも不首尾に終わらざるを得ない。まし  
て、ヴィルトガンスその人の作品や文学を論じる段階に達  
するはずもない。

ヴィルトガンスは、ほんとうに、いまさら取りあげて論  
じる価値のない詩人・劇作家なのだろうか。一九九七年に  
たまたま、ヨーゼフシュタット劇場 Theater in der Josef-

stadtで、ヴィルトガンスの『貧困』Armut(一九一五年初  
演)を観る機会があった。私の隣の席の老婦人が、涙を流  
しながらこの劇を観ていたのが印象的だった。もちろんこ  
の光景が、この劇の価値や、ましてヴィルトガンスの価値  
を決める要因にはなるまい。ヴィルトガンスがかつて、オ  
ーストリアを代表する詩人として賞賛されたこと、ブルク  
劇場の劇場監督に二度も抜擢されたこと、これらの事実  
も、その当時のオーストリアの政治情勢の作り上げたこと  
として、現在の評価には何の役にも立たないのかもしれない。  
生前の名声や名譽のゆえに、後世に価値のある作品を  
残したことはないのだから。それはその通りであ  
る。

現在すでにほとんど忘れられかけているヴィルトガンス  
に肩入れしなくとも、両大戦間時代のオーストリア文学に  
は、ヨーゼフ・ロートもいればローベルト・ムシルもヘル  
マン・ブロッホもいる。劇作家では、最近注目されている  
ホルヴァートがいる。しかしながら、当時のオーストリア  
文学を代表していたヴィルトガンスにこそ、後世になって  
再評価された文学者たちには見られない何か、そういうも  
のを読み取れるのではないだろうか。文芸批評ならば、作

品の価値をまず考え、価値がないとなればあっさり切り捨てることもできようが、文学研究においては、作品の価値評価とは別の視点が必要なのではないかと思う。流行作家ではないヴィルトガンスが、どうしてある時代を代表する詩人となり得たのか。ヴィルトガンスの作品そのものに価値がないのなら、なおさらこの問題は重要である。

このような観点から、私は、これまで主として取り組んできた亡命作家たちのオーストリア文学とは別の、いわゆるもうひとつのオーストリア文学を、ヴィルトガンスを軸にして論じたいと考えているが、小論ではその前段階として、ウィーン大学のシュミット＝デングラー *Wendelin Schmidt-Dengler* 教授の痛烈なヴィルトガンス批判を詳細に検討して、この問題への糸口を明らかにしたい。

## 二一

「アントン・ヴィルトガンスの文学史からの緩慢な消失」と題されたこの論文は、その表題の示すとおり、かつてオーストリアの国民的詩人の地位を得ていたヴィルトガンスがいかにして文学史記述からはざされることになったか、

その跡をたどりながら、そこにオーストリア文学史の問題点を鋭く洞察している、きわめて示唆的な論文である。

冒頭でシュミット＝デングラーは、自分のヴィルトガンス体験について述べている。彼は一九五二年にギムナジウムに入学したが、教科書の最初のページに、『オーストリアの歌』*Osterreichisches Lied* と題する詩が載っていたという。「そしてアントン・ヴィルトガンスはギムナジウムにいる間ずっと、私の読本の教科書の道連れとなった」、つまり、毎年毎年、教科書でヴィルトガンスのテクストを読まされ続けることになったのである。二年生で読まされた『私は都会の子』*Ich bin ein Kind der Stadt* という詩は、読まされたばかりではなく暗唱させられ、さらに、教科書に載っていない『最後の認識』*Letzte Erkenntnis* という詩は、教科書に載っていないがためにノートに書き写し、さらに暗唱させられた。「年がら年中ヴィルトガンスのテクストだった」が、とりわけ四年生のとき、「社会民主主義者でナードラーの弟子で、ヴィルトガンスとヴァインヘーバー *Josef Weinheber* を賞賛していたドイツ語の女性教授」<sup>10</sup> は、ヘクサーメターの叙事詩『キルピツシュ』*Kirbisch* の試験を課した。かの有名な『オーストリア講演』は、一九五五

年度、つまりオーストリアの国家条約締結に際して授業に取り入れられ、散文『少年の日の歌』*Musik der Kindheit*から採られた「パン屑 (Brosamen)」とドラマがそれに続き、ギムナジウム最終学年に駄目押しとして、ホメロスからヴェルギリウスを経てゲーテに至る叙事詩の伝統を知るため、再び『キルピツシュ』、といった具合であった。

洋の東西を問わず、国語の教科書で読まされたり暗唱させられたり、はては試験に出されたりした作品は、幼児期のトラウマのように、その後のわれわれの精神形成の核の一部となるものである。当時のシュミット・デングラーにはすでに、ゲーテ、クライスト、グリルバルツァー、ムシエル、ゲオルゲ、ホフマンスタール、トラークル、あるいはドストエフキーといった好みの作家や詩人がいて、教科書で嫌と言うほど読まされたヴィルトガンスが、どうしても好きになれなかったという。教科書でむりやり読まされたから好きになれなかった、と言えなくもないし、文学研究の対象としては、好き嫌いの問題は超越すべきなのかもしれないが、「自分の手もとにあったドイツで出版された文学史の教科書には、そもそもヴィルトガンスの名前など見あたらなかった」という事実が、ギムナジウムの生徒だっ

た当時のシュミット・デングラーの文学作品に対する感覚を正当化する裏付けとなっていた。このことからシュミット・デングラーは、ヴィルトガンスを「明らかにオーストリア的現象である」と断定する。

シュミット・デングラーは次に、ヴィルトガンスの同時代人の評価を列挙する。ヴィルトガンスはまた、じつに「敵」の多い詩人もあった。個人雑誌『炬火』*Die Fackel*で、ほとんどあらゆる同時代人を批判の俎上に載せたカール・クラウス *Karl Kraus* は、当然のことながら、ヴィルトガンスの「敵」として最初に名が挙がっている。クラウスがとりわけ激怒したのは、第一次世界大戦中に愛国的で戦闘的な詩を書いていたヴィルトガンスが、大戦後まもなく「モリエール記念式典に際して公式にパリに派遣され、尊大にも諸国民の和解と国際性についての講演をした」こと<sup>14</sup>とだったと、シュミット・デングラーは指摘する。クラウスばかりではなく、アルフレート・ボルガー *Alfred Polgar* もまた、ヴィルトガンスの詩や聖書劇『カイン』*Kain* (一九二年初演)のなかに、「ヴィルトガンスのちに身にまとうフマニスムスは、改悛よりはむしろ変身能力のある意識のカモフラージュであったことの間接証拠」を見出

している。

しかし何といつても、ヴェルトガンスの最大の「敵」は、ローベルト・ムシル Robert Musil をおいてほかにない。クラウスやポルガーの場合は、ヴェルトガンスのモラルの問題が最初であり、それが彼の作品の価値評価とも結びつくことになったが、ムシルの批判というより怒りは、「詩人と考えられていた者がまったく詩人などではなく、この時代の詩人や作家がなすべきであろうことを、その詩作についての考えと実際の詩作によって曖昧にした<sup>(18)</sup>」という点にあった。つまり、ムシルはそもそもヴェルトガンスを詩人としては認めていないということであり、この詩人でない人間を、自国の代表的詩人として賞賛していた当時のオーストリアの精神状況に対するムシル一流の批判の矛先が、ヴェルトガンス個人に向けられたと、私は考えたい。「ムシルがヴェルトガンスに言及した箇所をここですべて引用できない<sup>(17)</sup>」ほど、ムシルはヴェルトガンス批判を日記や手紙に書き続けた。ムシルのヴェルトガンス批判は、結局、ヴェルトガンスが過去の偉大な詩人たちの亜流、あるいは模倣者であったという点に尽きるようである。

カフカの才能にはやくから注目していたことで知られるフランツ・プライ Franz Blei は、ヴェルトガンスを飼いならされたアヒル (Hansgans) などと皮肉る。この皮肉によつて「詩人が自己と同一視し、自分の孤独と美と苦悩の象徴としていた白鳥が、ガチョウ (Gans) になつてしまつた<sup>(18)</sup>」と、シユミットロデングラーはプライに輪をかけた厳しい皮肉を浴びせかける。さらに彼は、「ヴェルトガンスはもはや、ほとんど彼らの書いたものの中でしか生き残つていけないかのように思われる<sup>(19)</sup>」と付け加える。もしそれがその通りになるとすれば、ヴェルトガンスは、自分の「敵」たちに感謝しなくてはなるまい。

しかし逆に考えると、それほど多くの「敵」がいたということは、ヴェルトガンスがやはり、その生きた時代に、何者かであり、何者でもない者ではなかったことの証拠である。それはその通りで、二〇年代のオーストリアの代表的詩人、二度にわたるブルク劇場の劇場監督就任という勲章を、ヴェルトガンスは与えられている。あのサリエリとモーツァルトを思い出すまでもなく、ムシルではなくヴェルトガンスが「公式」には当時のオーストリアの文学的代表者として通用していた<sup>(20)</sup>のである。

かつてのオーストリア文学の代表者ヴィルトガンスが、ドイツ文学史ではどのように記述され、そしていつこの記述から抹消されたかについて、シュミット・デングラールは詳細な情報を与えてくれる。まず、それをたどってみることにしよう。

ヴィルトガンスは「両大戦間の時代にすでにほとんどもっぱらオーストリアに関わる問題<sup>(21)</sup>」として捉えられており、一九二八年にドイツで出版されたアドルフ・バルテルス Adolf Bartels の文学史<sup>(22)</sup>では、ユダヤ人かどうかということが問題にされていて、「もしかしたらヴィルトガンスはアーリア人であるという理由だけで、ふるい落とされず<sup>(23)</sup>」この文学史に載せられたかもしれないと、シュミット・デングラールは推測している。「ここで言及されているのは劇作品と戦時中の詩だけで、そのほかのことについては何も書かれておらず、文学事典の項目よりも少ない<sup>(24)</sup>」という有様である。

さすがにウィーンで出版されたアーダルベルト・シュミ

ット Adalbert Schmidt の『オーストリアにおけるドイツ文学』*Deutsche Dichtung in Österreich* の第二版<sup>(25)</sup>では、オーストリアの詩人ヴィルトガンスについて、ずっと詳細な記述がある。これらの記述を分析することによって、シュミット・デングラールは、「オーストリアの文学史におけるオーストリアの作者たちの記述を決定している<sup>(26)</sup>」思考のモデル、つまり、オーストリアの作者たちは「オーストリアの外で定義された基準の近くには来るけれども、根本的にはそれと異なっている<sup>(27)</sup>」という公式を明らかにしている。つまり、例えば、ヴィルトガンスの劇作品のいくつかは、表現主義という枠組みに入れられているが、本質的には表現主義とは異なっているのである。

エドゥアルト・カストレ Eduard Castle の『ドイツ・オーストリア文学史』*Deutsch-Osterreichische Literaturgeschichte*<sup>(28)</sup>では、ヴィルトガンスの生涯と作品について多くのページが割かれているが、「シュミットの場合と同様ここでもまた、作者の出自を重視する文学史記述のあり方の影響が認められ<sup>(29)</sup>」るが、とくに、「アントン・ヴィルトガンスの父親が貧しい召使いと結婚した<sup>(29)</sup>」ことが、とりわけ重要な問題として取り上げられている。さらに重要なこ

とは、ヴィルトガンスの影響関係、つまり、「イプセン、ストリンドベリ、ハウプトマン、ボードレー、これらがヴィルトガンスの周囲にいて、その作品に住みついている。ヴィルトガンスは彼らと親戚関係にあるが、彼らとはまったく別の存在である」こと、叙事詩『キルビツシュ』がゲーテと比較されていることである。ヴィルトガンスは結局「叙事詩、演劇、抒情詩といったすべてのジャンルの達人として」カストレの文学史に登場し、「都市の詩人であるとともに田園の詩人として、学者であるとともに凡人として、とりわけ人間そのものとして描かれる。彼は現実主義者であり自然主義者であり、印象主義者であり表現主義者であり、当然のことながら、ブルク劇場の挫折した、それも二度にわたる挫折を経験した劇場監督である。彼は成功者であり、それゆえに勝利者であるが、同時にまた陰謀の犠牲者でもある」——このような記述を見ると、ヴィルトガンスはほとんど列聖された殉教者のようである。シュミット・デングラーは、このことの意味を、カストレの文学史が出版された一九三七年という年に見出している。この年は、オーストリアがドイツ第三帝国に吸収され、世界地図から永遠に消滅する直前の年であり、この時

点でヴィルトガンスは「オーストリアの愛国者<sup>(33)</sup>」として、風前の灯のオーストリアの独自性を代表する詩人だったのである。一九二九年に発表されていた『オーストリア講演』こそが、このときまさにオーストリア危急存亡の時のバイブルになったと言えよう。シュミット・デングラーはこれを、「ヴィルトガンスが一九四五年以降ふたたび、オーストリアの代表者に躍り出ることがするための基礎固めをした文書<sup>(34)</sup>」と、付け加えている。彼自身はまさに、このヴィルトガンス復活の時に、ギムナジウムにいたわけである。

それならば、ナチ時代に、このきわめてオーストリア的な詩人は、どのように扱われていたのであろうか。ヨーゼフ・ナードラーの『ドイツ民族の文学史』*Literaturgeschichte des Deutschen Volkes*<sup>(35)</sup>でも、ナチ時代を反映して、やはりまず詩人の出自が問題になっている。ウィーン説やヴェルテンベルク説を排して、ナードラー自身はオーバープファルツ説を主張しているが、その出自にかかわらず、ヴィルトガンスの詩がオーストリアの郷土(H Heimat)の息吹に満ちていることを否定しない。問題の『オーストリア講演』は「弁証法的に克服されている<sup>(37)</sup>」が、それは、「オ

ーストリアの作者たちを公平に扱おうとした文学史家ナー  
ドラー<sup>38</sup>」の苦肉の策である。

ナチ時代のこれ以外の文学史<sup>39</sup>では、「ヴィルトガンスは  
無名の群小詩人とどまつて<sup>40</sup>」いたにすぎない。ただ、ナ  
チの御用学者としての悪名を残したハインツ・キンダーマ  
ン<sup>41</sup> Heinz Kindermann はその著書で、ヴィルトガンスを盛  
んにやり玉に挙げているが、その攻撃の対象は、彼の文学  
ではなく、人間としての彼、とりわけブルク劇場の劇場監  
督としての彼である。一九四四年に出たこの著書の第二版  
ではさらに、「ヴィルトガンスのユダヤ人に対する好意的  
な態度<sup>42</sup>」が非難されている。ブルク劇場での失敗の原因  
が、ユダヤ人の作品を舞台に載せたことにある、というわ  
けである。キンダーマンのこの非難が逆に、第二次世界大  
戦後のヴィルトガンス賛美の間接的原因となるのは自明で  
あろう。

第二次世界大戦後に出たナードラーの文学史<sup>43</sup>では、『オ  
ーストリア講演』の評価は、「不幸な国、希望を必要とす  
る国家に対する慰めの言葉<sup>44</sup>」となり、その十年後の改版<sup>45</sup>で  
は、「希望の原理を放棄し<sup>46</sup>」、ただ慰めにされてしまう。シ  
ユミットもまた旧作の改稿に着手するが、もはやヴィルト

ガンスについての詳細な記述はなくなり、「この文学史を  
もつて、ヴィルトガンスの一章は終わつたも同然<sup>48</sup>」という  
ことになる。私のような日本のゲルマニスト志望の学生が  
「教科書」として使ったマルティニーニの文学史<sup>49</sup>には、たし  
かにヴィルトガンスについての言及があるが、シユミット  
「デングラーに言わせると、「他の文学史から切り取られ  
た拍子抜け<sup>50</sup>」の記述でしかない。

一九八一年、ヴィルトガンスの百回目の誕生日を記念し  
て、悲劇『愛』 Liebe (一九一六年初演) が上演されたが、  
なんと、「テクストそのものは少しも改変せずに喜劇とし  
て」<sup>51</sup> 演じられたのである。中年の夫婦の愛の危機を描いた  
この「悲劇」は、現代人にとっては「喜劇」ではないの  
だろうか。この問題は、ヴィルトガンスの文学史からの消  
滅とは別の問題なので、別の機会に考えたいと思う。シユ  
ミット「デングラーは、過去の文学史におけるヴィルトガ  
ンスの扱いを述べてきて、その最後に、ウィーン大学教授  
ヘルベルト・ツェーマン Herbert Zeeman<sup>52</sup>」によつて編纂され  
順次刊行されているオーストリア文学史において、ツェー  
マン自身がアントン・ヴィルトガンス協会の会長を務めて  
いるのに、「ヴィルトガンスについてほとんど何も述べて

おらず、むしろこの同じ本の、クラウス・ハイデマンによる、オーストリアにおけるシュタークマン出版社の役割についての論文<sup>53</sup>で、もつとも詳細に述べられている<sup>54</sup>」ことを指摘している。シュミット・デングラー自身はそれ以上何も言っていないが、ヴィルトガンス協会の会長自らが、ヴルトガンスの文学史における価値を認めていない、ということになりそう<sup>55</sup>だ。

ヴィルトガンスの評価をめぐる歴史を通観して、シュミット・デングラーは、「ヴィルトガンスはついに、たんに地方的な意味しかない作者に縮小されている<sup>55</sup>」と結論する。そして、このヴィルトガンスの最終評価から、シュミット・デングラーは、オーストリア文学という概念に付随する根本的な問題を提起する。すなわち、「オーストリア文学の歴史は、そもそも国民文学の歴史なのだろうか、そして、ザールラントや南チロルや、あるいはルーマニア・ドイツ人の文学と比較される、たんなる一地方の文学の歴史でしかないのではなからうか<sup>56</sup>」というのである。「この文学の特殊性や固有性をあくまでも主張するオーストリアの文学史<sup>57</sup>」が、はたして一地方の特殊で偏狭な文学を越えるものであろうか。ヴィルトガンスの例に見る限り、これ

までのオーストリア文学史が結局その域を越えるものではなかったと、シュミット・デングラーは考えているようである。したがって「時とともにヴィルトガンスはまた、オーストリアの文学史から消えていく。彼がもつとも大きな影響力を持っていた時代、すなわち一九二〇年からその死に至るまでの時代を代表する者として、かろうじて通用する<sup>58</sup>」と、彼は断言している。

ヴィルトガンスがかつてオーストリアを代表する詩人であったことも、五〇年代のオーストリアでヴィルトガンスが復活することも、そして、六〇年代以降、ヴィルトガンスの名が文学史から消えていったことも、すべてオーストリアの文学史に固有の問題として捉えるシュミット・デングラーは、最後に、オーストリア文学史という概念規定そのものに内在するもろの問題をまとめて、「ゲアハルト・リューム Gerhard Rühm はアントン・ヴィルトガンスのソネットをより良いものにしようとしたが、われわれは、オーストリアの文学史をより良いものにしようとしなくてはならない<sup>59</sup>」という言葉でこの論文を締めくくる。「より良いものにする」'verbessern'という動詞には、「少しはましなものにする」という意味がこめられているはずだ

が、この半ば自嘲的な言葉のなかにこそ、オーストリアにおけるゲルマニストのおかれたアンビバレントな立場が看取できる。

#### 四

近年、「ドイツ文学」ではなく、「ドイツ語圏の文学」、あるいは「ドイツ語文学」という言い方が、わが国のゲルマニストの間では定着しつつある。オーストリア文学もスイス文学も、それにリヒテンシュタインや、南チロル、アルザスといった地域の文学も、それがドイツ語で書かれていた限り、「ドイツ語文学」という枠組みの中に収めることができる。もちろん、第一次世界大戦以前のハプスブルク帝国やドイツ帝国の版図内のドイツ語を用いて書かれた文学作品も、現在の国境とは無関係に、すべてこの「ドイツ語文学」という範疇に入れることができる。

従来わが国のゲルマニステイク研究が、自覚なしに「ドイツ文学」という言葉を用いて行われてきたことから比べると、この「語」という一字のあるなしは、それこそ天と地の開きがあるように思われる。また、現在の国境を基準

にして、ドイツ文学とかオーストリア文学とか、あるいはスイス文学といった別々の呼称を用いて、これらの国の文学を区別することにそれなりの意味はあるとしても、スイス文学ならばともかく、オーストリア文学における歴史的な領域の変化、端的に言えば版図の縮小を考えれば、現在の国境という基準は、ほとんど意味をなさないだろう。

しかしながらまた逆に、ドイツ語文学、あるいはドイツ語圏の文学という概念に、オーストリアの領域の歴史的变化までも無造作に取り込んでしまい、オーストリアの文学をこのドイツ語圏の一地域に局限された現象に還元してしまうとすれば、シュミット・デングラーが懸念するように、「文学史においてドイツ併合 (Anschluss) がもう一度行われる」<sup>(6)</sup> ことになりはしないだろうか。

オーストリア文学という概念には、どうしても「オーストリアとは何か」という一種のイデオロギーが、その精神的支柱にならざるを得ないという側面がある。オーストリアが帝国だった時代には「オーストリアのドイツ文学」であつたものが、第一次世界大戦後に望まれずにして誕生した共和国においては、「ドイツ文学」になろうとしてなることができないう意味で、「オーストリア文学」を称

するほかなかつた。オーストリア文学は、歴史のある時点においては、このようなものだったのである。ヴィルトガンスがオーストリア文学の代表的詩人とされたのが、まさにこの時代であった。『オーストリア講演』には、ハプスブルク帝国への郷愁が読み取れるとしても、その伝統をその時点の小さな共和国オーストリアに生かし、フマニスムの牙城として、領土としては二度と望み得ない大帝國に匹敵する精神の大帝國オーストリアという幻想に転換しようという意志が、より一層強く詩人を動かしている。

しかしながら、戦後のドイツのめざましい経済復興に比して、オーストリアはどうだったろう。ナチの時代を全面的に否定し、この否定のエネルギーを復興に振り向けようとしたドイツとは違って、ヒトラーを結局は歓呼の声をもって迎え入れたにもかかわらず、ナチの最初の犠牲者と自己規定し、戦後の再出発をナチからの解放と捉え、ナチの問題を曖昧にしたまま、八〇年代半には、ついにかつてのナチ・エリート、ヴァルトハイム Kurt Waldheim を大統領に選んだオーストリアは、この点でドイツと一線を画するとしても、この一線は消極的な意味しか持ちえないのではないだろうか。

シユミット・デングラーがギムナジウムに通っていた五〇年代は、ナチ・ドイツの最初の犠牲者として、一度はこの地上から永遠に消滅したオーストリア再生の時であった。このオーストリア再生の時にふたたびヴィルトガンスがこの世に呼び戻されるのは、むしろ必然といつてよからう。彼は、精神の帝國としてのオーストリアの体現者なのだから。この五〇年代には、もしかしたら、この消極的な一線が、積極的な意味らしきものを持っているかのように見えていたはずだ。なぜなら、この一線によってのみ、オーストリアはドイツと別れて、第二次世界大戦後を出発せざるを得なかつたのだから。

ところが、やがて、自分たちの書いた本の販路を、オーストリアよりはるかに大きな書籍市場としてのドイツに求める、オーストリア出身の作家や詩人たちの世代が育ってくる。ドイツとオーストリアとの国境線が今後二度と変更されることはないとしても、オーストリアという、国土面積も小さく人口も少なく、めざましい経済発展も望めない狭い領域に閉じこもっていたのでは、作者としての生活すら成り立たない。オーストリア政府は、いくつもの文学賞（そのなかには「アントン・ヴィルトガンス賞」もある）を用意

して、それらの文学者たちをつなぎ止めておこうとするの(61)だが、こと文学の世界では、ドイツとの国境線は自ずから曖昧なものならざるを得ない。八〇年代になって、「オーストリア出身の文学なのか、それともオーストリア文学なのか」という問い(62)が投げかけられるのも、当然の成り行きであろう。とはいえ、オーストリア出身の文学者たちが、ドイツに向かつてどのような作品を送り出すのか、というような問題を個々に考えたとき、ドイツとオーストリアとの曖昧な国境線が、彼らの文学世界の根底に關わるきわめて重要な指標を与えるだろう。

シュミット・デングラーがヴィルトガンスを痛烈に批判するのは、要するにヴィルトガンスが、「自然主義とも印象主義とも表現主義とも象徴主義ともつながることができ、現実主義者でありかつ神秘主義者であり、悲劇の作者でありながら和解を求め(中略)上流の人たちと交流しながら貧者の詩人であり、悲劇の偉大な言葉を口にしながら同時にまた日常の歌人であり、ボードレールを翻訳しつつ民謡の調べに通曉していた(63)」つまり、あらゆるものを内包しながらそのいずれでもないという曖昧な存在であったことによる。しかしこれはなにも、ヴィルトガンスひとりの

問題ではない。

ブルク劇場の劇場監督としてのヴィルトガンスは「勝利者でもあり犠牲者でもあった(64)」が、ブルク劇場関係の文献を当たっていると、死者にむち打たないという死者に対する畏敬の念が働いているのかもしれないが、おおむね、ヴィルトガンス自身に対しては好意的なものが多い。ヴィルトガンスは、ハプスブルク帝国なきあとのオーストリアを、ブルク劇場によってドイツ文化の中心にしようという理想を抱いていたようである。そして理想は、つねに挫折に終わるものである。二〇年代という経済危機の時代にあつて、挫折に終わるしかない理想を追い求め、それをブルク劇場という場で試そうとしたことに対して、多額の赤字という、救いようのない現実が残された。しかし逆にまた、この危機の時代こそ千載一遇のチャンスであり、たとえばカバレティスト、カール・ファルカス Kurt Falck 率いるレヴューは、同じウィーンにあつて大当たりし、それこそ笑いが止まらなかつたそうである。ペンヤミンが見抜いたように、科学技術の発展によつて、芸術作品が一回性を喪失し、大量に複製され、大衆化社会に組み込まれていく時代のなかにあつて、ヴィルトガンスは時代錯誤的な理

想を追求したと言えよう。シュミットロッデングラウのヴィルトガンス批判の論点はもちろん、ヴィルトガンスのこの時代錯誤的な側面にもあるのだが、二〇年代のウィーンという時代を考えるうえで、ヴィルトガンスは、やはりきわめて意味のある詩人であるに違いない。シュミットロッデングラウの批判のなかで取り上げられたことのひとつひとつが、同時にまたオーストリア文学の多様性と曖昧さと矛盾とを検証するものであり、したがってヴィルトガンスは、その生き証人として、今後も幾度かは法廷に立つ機会を余儀なくされるであろう。<sup>(67)</sup>

ここでさらに、ひとこと付け加えておきたい。文学研究が、文学作品、あるいはこの方法論により即していえば文学テキストそのものの分析や価値評価ではなく、文学テキストに織り込まれた、意識的ないし無意識的な文化というコードを読み解くというような方向に進んでいくものだとすれば、ヴィルトガンスの場合、ヴィルトガンスが書き残した文学テキストそれ自体よりもむしろ、ヴィルトガンスという現象そのものを、両大戦間時代および第二次世界大戦後のオーストリアというコンテキストのなかで、重層的にテキスト化していく努力が今後いよいよ期待されること

になろう。

## 註

- (1) このデータベースには、一九五〇年以降に発行された日本独文学会学会誌『ドイツ文学』に掲載されたすべての論文と、学会に寄贈された文献が収められており、第二次世界大戦後の日本におけるゲルマニスティク研究の全容をほぼ窺い知ることができる。なお、著作権者は信貴辰辰氏である。拙稿「日本におけるカフカ研究についての一考察——日本独文学会文献情報(BG)を用いて」『成城文藝』一五七号、一九九七年、一三〇(一)〜一〇八(三)頁を参照されたい。

- (2) 私の手元にあるのは次の版である。Wildgans, Anton: *Rede über Österreich*. Wien/Leipzig: F. G. Speidel'sche Buchhandlung 1930.

なお、この講演は、一九二九年一月二二日にストックホルムのスウェーデン・オーストリア協会で行われる予定で、原稿も完成していたが、ヴィルトガンスの病状が悪化したため中止となり、講演原稿は一月二二日と二三日にウィーンの『新自由新聞』*Neue Freie Presse* に掲載された。さらに、翌年一月一日にヴィルトガンス自身が、ラジ

オを通じてこの講演原稿を朗読し、オーストリア国民に深い感銘を与えた。この同じ年に、『オーストリア講演』は一冊の本としても出版された。

- (3) 杉浦健之「アントン・ヴィルトガンス——「オーストリアの人間」の運命——」『ドイツ文学』第八一号、一九八八年、五六—六五頁。なお、この論文で用いられているのは、Wildgans, Anton: *Rede über Österreich*. 2. Aufl. Salzburg: Bergland 1976. の版の初版は一九六三年である。

- (4) 前掲書、五六頁。  
(5) 前掲書、六三頁。

- (6) 鈴木隆雄「オーストリア人神話——アウストロ・ファシズムの時代におけるヴィルトガンスの「オーストリア講演」——」都立大学『人文学報』一四二号、一九八〇年、八三—一四頁。

- (7) Schmidt-Dengler, Wendelin: *Das langsame Verschwinden des Anton Wildgans aus der Literaturgeschichte*. In: Schmidt-Dengler/Sonleiner/Zeyringer (Hrsg.): *Die einen raus — die anderen rein. Kanon und Literatur. Vorüberlegungen zu einer Literaturgeschichte Österreichs*. Berlin: Erich Schmidt 1994, S. 71-84.

- (8) Ebd. a. S. 71.  
(9) Ebd. a. S. 71.  
(10) Ebd. a. S. 71.  
(11) Ebd. a. S. 71.  
(12) Ebd. a. S. 71.  
(13) Ebd. a. S. 71.  
(14) Ebd. a. S. 72.  
(15) Ebd. a. S. 72.  
(16) Ebd. a. S. 73.  
(17) Ebd. a. S. 73.  
(18) Ebd. a. S. 74.  
(19) Ebd. a. S. 74.  
(20) Ebd. a. S. 75.  
(21) Ebd. a. S. 75.  
(22) Bartels, Adolf: *Geschichte der deutschen Literatur*. Grobe Ausgabe in drei Bänden. Dritter Band: Die neueste Zeit. Leipzig: Hassel 1928.  
(23) Schmidt-Dengler: a. O., S. 75.  
(24) Ebd. a. S. 75.  
(25) Schmidt, Adalbert: *Deutsche Dichtung in Österreich. Eine Literaturgeschichte der Gegenwart*. 2., ergänzte und er-

weiterte Auflage. Wien: Luser 1935.

- (26) Schmidt-Dengler: a. a. O., S. 75.
- (27) Edda, S. 75.
- (28) Castle, Eduard: *Deutsch-Österreichische Literaturgeschichte Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Dichtung in Österreich-Ungarn*. Unter Mitwirkung hervorragender Fachgenossen nach dem Tode von Johann Willibald Nagl und Jakob Zeidler hrsg. von Eduard Castle. Vierter Band. Von 1890 bis 1918. Wien: Fromme 1937.
- (29) Schmidt-Dengler: a. a. O., S. 76.
- (30) Edda, S. 76.
- (31) Edda, S. 76.
- (32) Edda, S. 76.
- (33) Edda, S. 77.
- (34) Edda, S. 77.
- (35) Nadler, Josef: *Literaturgeschichte des Deutschen Volkes Dichtung und Schrifttum der deutschen Stamme und Landschaften* Vierter Band: Reich (1914-1940). Berlin: Propyläen 1941.
- (36) その姓からするとユダヤ人であってもおかしくなく「ヴイルトガンス」の出自の問題について、「詩人の死後」その
- 未亡人が私家版で「ルーン」を詳しく探求している。vgl. Wildgans, Lilly: *Vorfahren. Die Geschichte der Familie Wildgans*. Wien 1936.
- (37) Schmidt-Dengler: a. a. O., S. 77.
- (38) Edda, S. 78.
- (39) Muiot, Arno: *Die Deutsche Dichtung unserer Zeit*. Stuttgart: Metzler 1944.
- Oehlke, Waldemar: *Deutsche Literatur der Gegenwart*. Berlin: Deutsche Verlagsgesellschaft 1942.
- (40) Schmidt-Dengler: a. a. O., S. 78.
- (41) Kindermann, Heinz: *Das Burgtheater. Erbe und Sendung eines Nationaltheaters*. Wien: Luser 1939.
- (42) Schmidt-Dengler: a. a. O., S. 78.
- (43) Nadler, Josef: *Literaturgeschichte Österreichs*. Salzburg: Otto Müller 1951.
- (44) Schmidt-Dengler: a. a. O., S. 79.
- (45) Nadler, Josef: *Geschichte der deutschen Literatur*. Zweite ergänzte Aufl., Regensburg: Habel 1961.
- (46) Schmidt-Dengler: a. a. O., S. 79.
- (47) Schmidt, Adalbert: *Dichtung und Dichter Österreichs im 19. und 20. Jahrhundert*. Salzburg/Suttgart: Bergland

- 1964.
- (38) Schmidt-Dengler a. a. O., S. 79.
- (49) Martini, Fritz: *Deutsche Literaturgeschichte von den Anfängen bis zur Gegenwart* 11. Aufl. Stuttgart: Kröner 1961.
- (50) Schmidt-Dengler: a. a. O., S. 80.
- (15) Ebd., S. 81.
- (32) Zeman, Herbert (Hrsg.): *Die österreichische Literatur. Ihr Profil von der Jahrhundertwende bis zur Gegenwart (1890-1980)*. Graz: Akademische Druck- und Verlagsanstalt 1989.
- (33) Heydemann, Klaus: *Im Windschatten Roseggers. Neue österreichische Autoren bei L. Staachmann 1904-1914*. In: Ebd., S. 157-203.
- (64) Schmidt-Dengler: a. a. O., S. 81.
- (55) Ebd., S. 81.
- (95) Ebd., S. 81.
- (57) Ebd., S. 81.
- (88) Ebd., S. 82.
- (65) Ebd., S. 84.
- (80) Ebd., S. 79.
- (61) 土屋勝彦「オーストリア現代作家と文学産業」名古屋市立大学教養部『人文社会研究』第三四巻「一九九〇年」三頁～五二頁「参照」。
- (39) Vgl. Polheim, Karl Konrad (Hrsg.): *Literatur aus Österreich. Österreichische Literatur. Ein Bonner Symposium*. Bonn: Bouvier 1981.
- (39) Schmidt-Dengler: a. a. O., S. 83.
- (45) Ebd., S. 83.
- (59) Vgl. Buschbeck, Erhard: *Raoul Arian und das Burgtheater*. Wien: Erwin Müller 1946.
- Hadamowsky, Franz (Hrsg.): *Hugo Thimmig erzählt von seinem Leben und dem Theater seiner Zeit*. Graz/Köln: Hermann Böhlau 1962.
- Hennings, Fred: *Heimat Burgtheater. Wie ich ans Burgtheater kam. 1906 bis 1922*. Wien/München: Herold 1972.
- Hennings, Fred: *Heimat Burgtheater. Das republikanische Hoftheater. 1919 bis 1938*. Wien/München: Herold 1973.
- Hennings, Fred: *Heimat Burgtheater. Des Hauses und meine Wandlungen. 11. März 1938 bis 31. August 1971*. Wien/München: Herold 1974.
- Kahl, Kurt: *Die Wiener und ihr Burgtheater*. Wien/

München: Jugend und Volk, 1974.

Lothar, Rudolph: *Das Wiener Burgtheater. Ein Wahrzeichen österreichischer Kunst und Kultur.* Wien: Augarten 1934.

Wildgans, Lilly: *Anton Wildgans und das Burgtheater.* Wien: Kremayr & Scheriau 1955.

(66) Vgl. Markus, Georg: *Karl Farkas. »Schan'n Sie sich das an! Ein Leben für die Heiterkeit.* Wien/München: Amalthea 1983.

(67) 八〇年代、九〇年代になっても、なお散発的にではあるが、ヴィルトガンスに関する二次文献が出版されている。

Gersinger, Heinz: *Der Dramatiker Anton Wildgans.* Innsbruck: Wagner 1981.

Hadriga, Franz: *Drama Burgtheaterdirektion. Vom Scheitern des Idealisten Anton Wildgans.* Wien: Herold 1989.

Friedel, Carmen: *Der junge Anton Wildgans.* Frankfurt a. M.: Peter Lang 1995.